国立国語研究所学術情報リポジトリ

On Some Grammatical Synonyms

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮島, 達夫, MIYAZIMA, Tatuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001736

いくつかの文法的類義表現について

宮　島　達　夫

ここでは，国語研究所報告25『現代雑誌九十種の用語用字　第三分冊(分析)』（以下単に「報告書」とよぶ）にのせた，助詞・助動詞における類義表現の分析をおぎなうような問題をとりあげる。対象の範囲などは報告書と同じだから，そちらを参照していただきたい。

ぼくは，助詞・助動詞の多くは実は語尾だという立場に立つ。したがって，用言＋助詞・助動詞も，単独の用言の語形と同列において比較されるべきものだとおもう。しかし，雑誌の語い調査のばあい，「た」や「う」という助動詞は採集してあっても，これに対立すべき現在形などの語形（またはゼロ語尾でもいいのだが）は採集してなかったので，報告書では，両方に助詞・助動詞をふくむ文法的類義表現しかとりあげられなかった。それで，その後，あらためて用言＋助詞・助動詞に対立するような，単独の用言の語形の一部を採集しなおした。ここではおもにその種の類義表現を分析の対象とすることにする。

以下につかう「現在形」ということばのなかには，したがって，終止連体形の「書く」以外に，「書かれる」「書きます」「書かない」「書きません」「書くだろう」などもふくまれることになる。ただし，この論文では，直説法肯定形のばあいについて，すなわち，「書く」「書かれる」「書きます」などについて，その用法を，他のムードやアスペクトの形（「～う」や「～ている」）と比較しようとするものであり，いちいちことわることはしないが，「書かない」「書きません」「書くだろう」などは，ここでいう現在形に入れないことにする。[注1)]

第1節　意志の表現

「～う」の形（いわゆる助動詞の「う(よう)」がついた形，以下意志形とよぶ）は，話し手の意志を表現するが，現在形(ここでは「～ている」の形もふくめる)

もまた意志の表現にもちいられることがある。

○「どこへ？」
「それが，この駕籠をまわして下されたお方のお申しつけで，申しあげられませぬ。さきへ参ってから**申します**」（講談倶楽部　12月　365）

○「抱かないって約束できる？」
「誓うよ！手はこうやって脇に**つけておく**」（スクリーン　2月　83）

○一般に一重を二重瞼にした方が効果的という場合を**申しましょう**。（トルーストーリィ　8月　178）

○焦らず，さわがず，じりじりと布陣による強化を計りナインが自信をもってプレイするようにみちびいたことを推賞，あらゆる点を総合して80点を**つけておこう**。（野球界　11月　96）

現在形の方は近い未来における確定的な事実をあらわしている，ともいえるかもしれないし，未来の表現か意志の表現かにわけようとすると，まようばあいが少なくない。しかし，以下にのべるように，両者のあいだに用法の分担ともいうべきものがあることを考えると，やはりこれも意志形とともに意志を表現しているとみてよいと思う。

つぎのような終助詞のついた形では，現在形だけがもちいられる。

○わたし，やっぱりあなたと**別れる**わ。（笑の泉　12月　242）

○そうか。じゃア，あんたのええのに，**する**わ。（週刊朝日　8月5日　57　これは男性用語としての「わ」である。）

○誰か結婚する人にこの花束**あげます**ヨ―　（平凡　5月　183）

○俺んとこでまた札くばりをやらねえか。そしたらその服の代を払ってここから**出してやる**ぜ。（トルーストーリィ　6月　107）

○金のことなんか，われわれがいくらでも**応援する**さ。（キング　4月　199）

○それどころか，――**頼む**ぞ。（傑作倶楽部　12月　348）

意志形特有の用法としては，つぎのようなものがある。

1）　終助詞「か」などのついたもの。

○今日の事は家へ帰っても**黙っていようか**。もう僕の眼なんかどうなってもかまうもんか。（人生手帖　7月　22）

○桜吹雪か……，ドレ，ひとつ**はじめようか**……　（主婦と生活　4月　98）

○子供を，父親に**会わせましょうや**。（サンデー毎日　2月12日　71）

これらは，意志形に単純に「か」や「や」がついたものとしてよりも，「～うか(や)」全体として意味を考えるべきであろう。「黙っていようか」は自分のとるべき行動についての自問であり，「会わせましょうや」は相手の判断をたずね

ているものである。「はじめようか」は疑問ではなくて，自分の意志をあからさまにいうのをさけた形である。（このばあいは「はじめるか」にかえてもそうかわらない。）

○よい一両日待てい。予も**考え直してみようぞ**。（週刊新潮　9月10日　42）

のように，「～うぞ」の形だと，「みるぞ」とちがって古い文体に属することになる。

○ひとつお国自慢の芸能談あたりから**伺いましょうや**。（実業の日本　9月15日　24）

では，「～う」が意志か誘いかけかが問題であるが，意志だとすれば，この「や」はやはり現在形にはつかない。

2）疑問詞とともにもちいられたもの。

つぎのように，疑問詞が上にあるときは，「か」がついたものと同様，現在形にはならない。実例は下にあげる自問のもの一つだったが，「～うか」と同じく相手の判断をもとめるものもあるはずである。この例を「何を読む」にすると，自分のではなく相手の意志をたずねていることになる。

○雨の日は読書によろしく，思索にふさわしい。何を**読もう**。（日本週報　7月1日　54）

3）「～うではないか」の形のもの。

実例は方言のもの１例しかなかった。

○どや，おまきさん，わしが，この家**買おうやないか**。（週刊朝日　9月2日　58）

4）「～うとする」「～うという」の形のもの。

○人民の勢力を**一掃しようとした**者たちは　（中央公論　11月　281）

○豪華な食事を奮発して，思い出の種に**しようという**趣向である。（装苑　3月　79）

○東京近在の主だったバラ団体が，共同で**開こうと**計画中の相互懇親を主眼とした競技展は　（農耕と園芸　2月　93）

これらの用法は，意志形が過去の表現や連体的用法をもっていない点をおぎなうために発達したものと思われる。

以上をのぞいた，一応おきかえ可能なものの数は下のとおりである。

層[注2)]	一	二	三	四	五	計
現在形	—	5	1	1	14	21
意志形	1	12	3	13	20	49

これらを，小説の会話文や座談会の記録などの「会話」の部分に出ているものと，「地の文」に出ているものとにわけると右のとおりである。現在形は会話に多いといえそうだが，統計的には有意差はない。

	会話	地の文
現在形	16	5
意志形	27	22

$\chi^2=2.76$

第2節　「進行中」の表現

「～ている」は動作が進行中であることをあらわすことがある。ただし，この「進行中」というのは，ややあいまいな表現であって，広く解釈すれば，

○工場で私の**扱っている**機械は操作が複雑なため　(知性　5月　283)

○市井の輩を相手に，気ずい気ままに**くらしている**のが一番だと　(小説倶楽部　2月　68)

○旭特殊硝子はテレビのブラウン管を**製造している**が　(東洋経済新報　4月7日　72)

のように，あるはばをもった期間を一般化したものもはいるだろう。しかし，ここでは，この用語を，つぎに示すような，ある特定の瞬間を基準にしたものに限定する。

○すみませんが，中山夫人が先生を**呼んでいます**。(リーダーズダイジェスト　1月　44)

○いや，このへんはおだやかでも，天狗平から上は物凄く**吹いていますよ**。(小説新潮　3月　63)

○**泣いている**のは由美姉さまでした。(宝石　6月　105)

○裏山を**散歩している**元気な大学生の患者の姿が窓の向うに見えている。(小説の泉　3月　236)〔「見えている」は状態の表現だから，ここには入れない。〕

これらのなかには，現在形でおきかえても，それほど不自然でないものもあり，またそれが不可能なものもある。一般的にいうならば，「～ている」が積極的に動作の進行をあらわしているのに対して，現在形はこれに無関心な形式である。すなわち，動作の進行をも，その瞬間的な完了をも，積極的にあらわしているわけではない。それが，どのようなばあいに「～ている」と同じ事実の表現にもちいられるのかを，以下，終止法と連体法のばあいについてみることにする。

〔終止法のばあい〕

会話などのように，発言の瞬間が基準になるものについては，「～ている」を現在形でおきかえることはできない。上の「呼んでいます」「吹いています」を「呼びます」「吹きます」にすればわかるように，「～ている」が現在の事実の表現なのに対して，未来の事実を表現することになるからである。

しかし，物語のばあいなどのように，発言の行為が特定の場面をはなれ，発言の瞬間ということが問題にならないものについては，現在形も「～ている」とそれほどちがわなくなる。

○浅間の山麓をめぐって秋の風が**ふく**。夏のころ林間にうたわれた青春の歌は

○風はセンターよりホーム・プレートに強くなく弱くなく**吹いている**。(野球界

もう聞かれない。(小説サロン　11月　135)

○一同はホーリーナイトの聖歌を合唱した。兄弟は独逸語である。ジーナは伊太利語であつた。料理人の陳范は広東語で，チーナは英語で**歌ふ**。そして新介は日本語と，歌詞はまちまちでも，メロデーが一致するので不都合になかつた。(オール読物　6月　154)

○たそがれのうすら陽に，におうような下り藤を，晩春のそよ風が，鈴玉をふって**ゆるがせる**。その紫に対応して，泉水をかこむ庭一面には，紅白のツツジが満開だった。(小説新潮　8月　26)

○「今日ね……」とヨシエが男たちを見上げるようにして**いう**，「緊急動議を出したかったのよ。(世界　1月　305)

5月　74)

○まり子は，太刀川圭一の下宿で，男臭い下着のほころびを繕っていた。たどたどしい手附きで針を運びながら，低い声で**歌っている**。(小説と読物　6月　81)

○改修を終った平等院前の堤も，すっかり葉桜になった。そこから塔の島をへだてて，対岸興聖寺の石門をのぞめば，泡立つ急湍に，山吹の群落が**ゆれている**。(講談倶楽部　6月　364)

○「一回……，二回……。」
うしろで，下士官が**いっている**。私は，眼がくらんで来た。(文芸春秋　10月　323)

ただし，これらの例についても，両者を比較するかぎり，「～ている」の方が進行中をあらわし，現在形の方は断続的ないし瞬間的に吹いたり歌ったりしていてもかまわない，というニュアンスがあるかもしれない。

「～ている」の形をとらずに，しかもわりあいはっきりと進行中の表現だといえるのは，「くる（～てくる)」「いく(～ていく)」のばあいである。これは，「きている」「いっている」という表現が，動作の進行をあらわさずに完了をあらわすからである。

○たしかに，彼女が口吟んでいるような声の高低が，時折断続しながら**洩れてくる**。(小説春秋　6月　130)

○金沢に程近い矢部川を一艘の渡し舟が時ならぬ三味と太鼓の音を鳴らして**渡って行く**。一つの方には芸と器量で評判の白糸一座が乗っており，もう一つは南京出刃打ちが売物の寅五郎一座だった。(映画ファン　8月　169)

〔連体法のばあい〕

連体法については，終止法と事情がちがう。つまり，現在形と「～ている」とで，おきかえてもおかしくない例がかなりある。

○確かにミシミシと廊下を**歩く**足音がしたので，てっきり泥棒だと思うと，急に怕くなった。(笑の泉　4月　98)

○彼がその日の午後，私と原が**歩いてゐる**後からやつて来るのはヘンであつた。(文芸　3月　176)

○馬の匂ひ，厩の匂ひ，長靴の匂ひ，新らしい鞍のギシギシいふ音，光つた拍車　(知性　8月　179)

○アダジオを踊る鈴木さん　(主婦と生活　8月　373　写真の説明)

○一体初めにあるものは何だらうか。その女の眼とか脣とか髪とかいふものか……(中略)……それともその瞳に輝く光，親しげに洩らした微笑なのか。(文芸　2月　176)

○あの美しい澄んだ空を流れる雲の中から，今にも優しい言葉のお手紙が落ちて来はしないかなどと　(トルーストーリィ　3月　201)

○雨の降る田の中で，一日中腰をまげ，ヒルに吸いつかれながら田植をした六年生の勝子ちゃんはこう，うたっている。(週刊読売　1月1日　70)

○するとひとりの女が，こんなことを云っているのが聞えた。(読切小説集　4月　293)

○るい子が指さす踊りの輪の中に，子供たちの手振りをまねて踊っている娘，それは父を追ってやって来た珠子だった。(婦人倶楽部　3月　45)

○飯田橋（中央線）を過ぎるとお堀の水が昇ったばかりの陽を受けてきらきらと輝やいて居るのが心よく目に泌みます。(映画ファン　11月　63)

○でもそれは僅な時間なのでやはり心の底に流れている淋しさはぬぐうべくもありません。(左と同じ文章)

○そのするどい視線は，うららかな五月の陽ざしの降っている沼のふちへ行っている。(面白倶楽部　8月　283)

これらのばあいにも，もちろん，現在形は積極的に進行を示しているわけではないから，そうみとめてよいかどうか，あいまいなものもある。

○生き物のように動くふしぎな風船　(週刊新潮　9月3日　11)

という写真説明の文は，一応「動いている」と同じものと判断したが，実は「動くことのできる」「動く性質をもっている」ということかもしれない。

連体法で進行をあらわしているものの数は右のとおり。この中には，まったく主観的な判断だが，おきかえにくいものがそれぞれ1～2割はある。まず，現在形の方では，

層	一	二	三	四	五	計
現在形	6	18	—	6	54	84
～ている	9	9	3	8	34	63

○市太郎は町の方に行って帰って来る途中の畑の中でこの猫を見かけたことがあった。(小説新潮　8月　302)

○後半に入ると，次第にスペクタクル映画の正体がうかび上って迫力もましてくるのに興趣の盛り上るのを感じた。(映画の友　2月　61)

など，「～ている」の形にすると，動作の完了したあとの状態をあらわすことになるものである。「～ている」の方ではつぎのような例がおきかえにくいと思う。

○茅盾と私がこれを**訳している**とき，茅盾が手を休めて，ひくい声で言った。（世界 8月 182）

○私は好奇心から，そっとお部屋の前に歩みよって行きました。**泣いている**のは由美姉さまでした。（宝石 6月 105）

これにもいくつかの条件があるはずであるが，それをあきらかにするためには，これだけでは資料がたりない。

なお，上の数字には，

○アヴェマリアのこゑひときはたかしアンゼラスの鐘なる坂を**のぼる**列より（短歌 11月 49）

のように，短歌・俳句など文語文の中に出てくる現在形はふくめてない。文語のばあい，進行をあらわす「～ている」の形がないから，現在形をつかうより手がないからである。

文語（というよりも古代語）では，現代口語の現在形と「～ている」の形とをあわせたはたらきを，現在形一つですましていたわけだ。（「～ている」のもっているもう一つの意味――完了は，「～り」「～たり」があらわしていたことはもちろんである。）それで，連体法だけでなく，終止法でも現在形が動作の進行をあらわしている。上にあげた「呼んでいます」「吹いています」のように，会話のなかでもちいられて，発言の瞬間における進行をあらわすばあいでも，やはり現在形が使われる。（数字は日本古典文学大系のページ数。）

○「昼より，西の御方のわたらせ給ひて，碁**打たせ給ふ**」といふ。（源氏・空蟬 1—111）

○「北殿こそ，**聞き給ふ**や」など，言ひかはすも聞ゆ。（源氏・夕顔 1—139）

○「三条，こゝに**召す**」と，呼び寄する女，みれば，又，見し人なりけり。（源氏・玉鬘 2—345）

○「大将の君は，丑寅の町に，人々あまたして，鞠もてあそばして**見給ふ**」と，きこし召して（源氏・若菜上 3—304）

○御厠人なるものはしりきて，「あないみじ。犬を蔵人二人して**うち給ふ**，死ぬべし。犬をながさせ給ひけるが，かへり参りたるとて**てうじ給ふ**」といふ。（枕草子 9段 53）

これらは，現代語だったら動作性動詞の現在形はつかわないところだ。谷崎源氏（新訳）では，上にあげた四つをそれぞれ「碁を打っていらっしゃるのです」「聞えますかい」「お召しであるぞ」「見ていらっしゃる」と訳している。一方，

○「……「にくし」と，なおぼし入りそ。罪もぞ**得たまふ**」と，御髪を撫でつくろひ

つゝ，きこえ給へば　（源氏・総角　4—420）

のように，現代語と同じく未来の事実をのべているところもある。（谷崎訳「罪になりますよ」）とにかく，全体として，古代語動詞のアスペクトないしテンスが，現代語のそれとちがっていたことはあきらかだ。これまでは，もっぱら「き」とか「たり」とかの助動詞の意味として問題をあつかってきたために，もっとも基本的であるべき，助動詞や助詞のつかない用言のもつ文法的意味が，ほとんど研究対象にさえなっていなかった。これから大いに開拓されることを期待したい。

なお，沖縄語（首里方言）でも，やはり動詞は終止法で動作の進行をあらわすことができる。[注3] 沖縄のばあい，終止形や連体形は，連用形にあたる形に「居り」にあたる 'uN がついてできたものである。すなわち，直訳すれば「読みをり」「書きをり」にあたる。ここで興味あることは，本土の古代語についても，やはり終止形・連体形は連用形に「居り」にあたる動詞「う」がついてできた，という説があることである。[注4] この説によれば，古代語の動詞が進行をあらわしえたことは，説明がつく。[注5]

付）1人称の心理活動の表現について，

判断・希望などの心理活動をあらわす動詞が話し手の心理の表現として終止法に立つとき，それは現在形で現在の事実を表現する。これは現在形としては，やや例外的な事実である。しかし，一方，これとはほぼ同じ意味の表現として，「～ている」の形ももちいられる。

○日本の打者の中には，完全無欠の良い打撃のフォームをしている人はないと**思う**。（ベースボールマガジン　3月　193）

○越前の朝倉から将軍を迎えの武士が来て立正寺を取り巻きました。**御助勢を願います**。（週刊サンケイ　3月11日　83）

○熊にしては足跡が余りに人間に近すぎるので，私は猿の大きな奴だと**思っている**。（文芸春秋　9月　207）

○この意味でも，映画「女囚と共に」が，……を促す役目に少しでもプラスになれば，と**希っている**。（キング　9月　40）

現在形の中には，ていねい体の「思います」を含むが，否定の「思わない」「思いません」は含まない。「～ている」の方についても同様だが，ここにはさらに「～ておる」「～ております」をもあわせた。なお，ここでいう終止法には，これらの形が文の終わりにきたもの，それにさらに終助詞や「のだ」のついたものを入れた。なお，ここにあげる数は，現代雑誌九十種の調査の全標本についてのものである。助詞・助動詞の調査は三分の一の段階までしかやってないから，ほ

ぼその三倍の量にあたる。

	現在形	～ている
思う	377	31
考える	9	7
信じる	3	7
ねがう	3	2
のぞむ	9	2
いのる	4	4
希望する	2	2
気がする	26	2

「思う」が「思っている」にくらべて特によく使われる理由は，それが客観的な「思考活動をしている」という事実の表現から，話し手の判断をより直接的にあらわす陳述的な表現になっている，いわば助動詞に近づいていることであろう。

このような傾向は，形式の上ではつぎのような点にあらわれている。すなわち，「思う(思っている)」は「……と」「さびしく」のような補語のほかに，つぎにあげるような成分をうけることができるはずであるが，「思う」の方は「思っている」にくらべてこれらをうけた例のしめる割合が少ないのである。[注6)]

（主語）　私は，それでいいのだと思っています。（小説春秋　9月　95）

（状況語）　そして心楽しかるべき夫婦銀婚旅行の旅先から皮肉な投書なぞ，やにりしないで置いてよかったと今では思っている。（アサヒカメラ　12月　131）

（目的語）　私は素人批評賛成論者がとかく目先のことばかりを考えて，得手勝手な議論をするのを不満に思っている。（世界　7月　122）

（修飾語）　最後に今日と限らないが近来の立合の悪さを何とか改めてもらいたいと切実に思っている。（相撲　7月　116）

	現在形					～ている				
	主語	状況語	目的語	修飾語	(計)	主語	状況語	目的語	修飾語	(計)
思う	28	1	5	5	(377)	12	3	2	1	(31)
考える	2	—	—	—	(9)	3	—	—	—	(7)
信じる	—	—	—	—	(3)	4	1	1	—	(7)
ねがう	—	—	2	—	(3)	1	1	—	—	(2)
のぞむ	—	—	9	1	(9)	1	—	2	—	(2)
いのる	—	—	1	—	(4)	—	—	—	—	(4)
希望する	—	—	2	—	(2)	—	—	2	—	(2)
気がする	—	—	—	—	(26)	1	—	—	—	(2)

(計)としてカッコのなかにあげた数字は，「思う」「思っている」など，おのおのの総数である。「考える」以下のものについては，これだけの数字からはなんともいえないが，「思う」については，「思っている」にくらべて主語などをともなうものが少ないことが，はっきり数字にあらわれている。

なお，上にとりだしたのは，１人称についたものばかりだが，「思っている」などについては，これ以外に，２・３人称のものもある。「思う」などについては１人称しかない。もし終止法で２・３人称にもちいられたとすれば，それは，話しのときを基準にしたものではなくて，歴史的現在のようなばあいである。

第３節　中止法の表現

文を中止するのには，動詞・形容詞などの連用形と，これに「て」のついた形とがともにもちいられる。

○このあたり，昔は大きな一本松があり，その根元に地蔵さんが祀られていた。（キング　8月　169）

○徳島のお城は，いまそのなかに城跡があって，これはなかなか美しい。（美術手帖　10月　増刊　69）

○袖も袖口も毛抜き合せに作り，表袖を付けて裏袖をまつります。胸のとめ布を作って，ボタンホールをかがり，くるみボタンを作って身頃の製図の位置に付け，とめ布をとめます。（若い女性　4月　250）

○でも，机やいすもなく，かますをしいて勉強しました。（婦人倶楽部　9月　149）

○私がどちらの道を歩くかといふことは，深い理由なんかなくて，その時その時の気まぐれで　（文芸　3月　176）

〔その１〕　動詞の肯定形のばあい

「(で)ある」はさきの調査で助動詞としたので，ここでもそうしておく。

連用形の中止的用法の総数は，下のとおりである。（報告書 p. 67に，連用形ＩＣとしてあげた数字を若干修正する。）このうち，「～て」でおきかえられないものは，つぎの３つのばあいである。

層	一	二	三	四	五	計
	127	286	273	437	396	1519

(1)　連用形をかさねて，「～ながら」の意味をあらわすもの

○そのうしろから，騎馬の老人が，手綱を引きしめ，ひきしめ，ゆっくりと馬をあゆませていた。（読切倶楽部　5月　134）

(2)　似た語の連用形をかさねたもの

○仲間たちは入れ替り立ち代り見舞に来てくれた。（実話雑誌　9月　198）

この(1)，(2)はむしろ２語の連続としてより１語とみなすべきものであろう。

(3)　つぎにあげるような，対比的な慣用句

○婦人雑誌なんかには毎月手をかえ，品をかえて出ている。（サンデー毎日　5月27日　26）

○かげとなり日向となって来た近藤課長と　（読切倶楽部　7月　197）

○とにかく桂木と云い淡路と云い最も幸運に恵まれたスタートを切った訳だ。（映画ファン　3月　63）

「～て」については，報告書でつぎの四つにわけた。

10）接続（ふつうの中止的用法）

11）補助動詞への接続

12）依頼（「助けて！」の類）

13）主張（「柔軟性があってよ」の類）

この 11）以下は連用形にない用法である。また，10）のなかにも，副詞についたもの（「かくて」）・形容詞についたもの・否定形やていねい形についたもの（「～ないで」「～なくて」「～まして」）などがある。これらを除くと，「～て」の数は右のとおりである。

層	一	二	三	四	五	計
	455	729	562	841	1321	3908

この中には，連用形でおきかえられないものが，まだかなり含まれている。

(1)　つぎに助詞がくるばあい

○焼け跡に他の家が建ってから舞い戻って来た。（別冊文芸春秋　5月 86）

○こゝで弱気を起しては二人とも身の破滅だ。（人物往来　3月　75）

○私や子供をすててまで，夢中になるほど　（サンデー毎日　1月22日　8）

○柵を破ってでもそこにたどりつく　（婦人朝日　8月　47）

○蔵人を油断のならぬ相手と見てか，蓮は竜尾に構えた。（読切小説集　7月　272）

○親分の心配りがあってこそ，坂田選手は，藤村のもって居た大記録を破ったのである。（野球界　12月　185）

○繁殖期には必ず上陸し，雌雄相会しての生活をする。（科学読売　3月　38）

○国際劇場の正面口にずらりと整列してね，記念撮影をしたんだ（週刊サンケイ　6 月10日　16）

○内所へそう云ってな，三十分ほど暇を貰って，川べりの汁粉屋まで来ておくれと伝えて貰いてえ　（小説の泉　4月　259）

このうち，「ね」「な」など間投助詞のついたものは，他のばあいと多少ちがうかもしれない。すなわち，「～てから」「～ては」「～ての」が連用形にけっしておきかえられず，その根拠がいわば文法的なものであるのに対して，連用形の中止法に間投助詞がつかないのは，いわば文体上の理由によるものと思われる。連用形の中止法がかたい文体（書きことばや演説）でもちいられるのに対し，間投助詞が

使われるのはずっとくだけた会話であり，その点が不調和なのだろう。だから，連用形に間投助詞のついた例も，ごくまれにはあるかもしれない。

なお，「～て以来（以後）」などのように直後に時を表わすことばがくるばあいも「～てから」と同様に連用形にはならない。

○「結婚しませんか」
と**云われて**以来，夏子はいままでの軽はずみを悔いる心で一ぱいになった。（小説新潮　11月　45）

○**結婚して**一年余り後，敗戦の日が来た。（新潮　2月　135）

○と言う次第で**卒業して**間もなく……（中略）……第九シンホニーのソリストとして抜擢され，（音楽の友　11月　110）

(2)　補助用言につづくもの

報告書では「ある」「いる」「おく」などの動詞につづくばあいを特に取り出して別あつかいにしたが，以下にあげるものもこれと同種のものと思われる。

○国産品を四五本**持って**歩いたほうが　（知性　5月　194）

○昨日姉から今度の切符を二枚**送って**よこしましたの。（スタイル　4月　208）

○次の日から彼と一緒に私は村を**演説して**廻った。（主婦の友　10月　295）

○夏川静江の奮起一番を**望んで**やまない。（傑作倶楽部　4月　316）

これと同じ性質のものに，補助形容詞につながるものがある。

○ほとんどが何らかの被害を受けているとみてよい。（小説新潮　6月　261）

○三塁の三宅を二塁に**回して**欲しい。（野球界　4月　183）

○尾崎は自分の思想上の立場を，妻には**知らせて**なかった。（婦人公論　11月　122）

○Ｂ型もしくはＡＢ型であると**判定してしまって**いっこうに差支えないことになる。（自然　2月　11）

つぎにあげるものも，この種のものの延長といえるだろう。

○ウイリアム・アリソンと**かいて**，間違いであろうか。（週刊東京　6月30日　60）

○先行きは安くなると**見て**狂いそうはない。（実業の日本　5月1日　35）

さらに，「～てごらん」「～てちょうだい」「～ておいで」のように，命令の意味をもつ特殊な名詞につづくばあいがある。

(3)　後置詞化したもの

「～として」「～において」のように，格助詞＋動詞＋て　の構造をもっていて，その動詞が実質的意味を失い，全体として格助詞の用法をおぎなうような役割をはたすものがある。これを「後置詞化」とよんでおく。「～として」「～において」は「～とし」「～におき」にならないが，なかには連用形の方ももちいられるものがある。

○郵便集配人に対し暴行を加え（ジュリスト　11月15日　63）

○政府が改正問題につき国民議会に提案を寄託し得るか否かを（ジュリスト　7月1日　59）

○在庫の減少により，今期は価格変動準備金の戻りが出るはずだし（東洋経済新報　3月10日　66）

○米軍に対して，保証を要求することも（週刊サンケイ　1月8日　32）

○世界の平和の問題について関心をもちはじめる（世界　10月　56）

○第2期に属すべき50余点もまた戦災によって失われている。（みづゑ　7月　39）

形が同じ「～として」「～について」であっても，つぎにあげるようなのは，実質的な意味を失っていないから，もちろんここで問題にしているものとは別である。

○その主要作家がすべて西洋の作家をモデルとして出発した。（世界　1月　53）

○ただ早く床に就いて，眠りのなかに，現実を忘却して　（中央公論　8月　173）

ただし，後置詞化したものとそうでないものとのあいだには，大きなへだたりがあるわけではないから，みとめ方によっては，以下にあげる数のなかにも，実質的なものとみるべきものがあるかもしれない。

後置詞化したもののうち，連用形と「～て」と両方の形があるものについてみると，「～に対しては」「～についてさえ」のように，つぎに助詞がくるばあいに連用形にならないだけでなく，

○社会が映画に対して関心をもつのは，つねにその内容に対してである。（中央公論　10月　156）

○国民の要望に答えうるだけの力をもっているかどうかを私が危惧するのは，この点についてである。（中央公論　5月　171）

のように述語になっているばあいにも「～に対し」「～につき」にはなりにくいようである。おそらくほとんどならないといってよいだろう。それで，表には一応「～に対して」などの総数を示したが，このうち助詞や「である」につづくものの数を（　）のなかに入れておいた。しかし，この（　）のなかの数をひいても，なお「～て」の方が連用形よりもずっと多くなっている。ただし，ここに実例がないものも，「～として」「～において」など2，3をのぞけば，可能性としては連用形の言い方もあるだろう。逆にどうしても「～て」にならないのは，ないようである。

	連用形	～て		連用形	～て
(と)あいまって	—	2	(を)あげて	—	2

(に)あたって	1	3 (1)
(に)おいて	—	39(14)
(に)応じて	—	2
(に)かぎって	1	1
(に)かけて	—	9 (3)
(を)かねて	1	—
(に)かんがみて	1	—
(に)関して	2	5 (2)
(と・に)くらべて	1	11
(と)ことなって	2	1
(に)際して	1	3 (2)
(に)したがって	—	10
(と)して	—	279(81)
(に)しては	—	6 (6)
(を)して	—	4
(に)そって	—	4
(に)対して	27	54(14)
(と)ちがって	1	10
(に)ついて	4	127(42)
(に)ついで	—	2
(を)通じて	1	11
(に)つけて	2	2 (2)
(に)つれて	2	7
(を)とおして	—	3
(に)とって	—	39(22)
(に)ともなって	4	4
(と)ならんで	—	2
(を)のぞいて	1	7 (4)
(に)のっとって	—	1
(に)反して	1	2
(に)ひきかえて	1	—
(に)比して	1	2
(を)ふくめて	1	4
(から)みて	—	6
(に)むかって	1	23 (1)
(に)むけて	—	2
(を)めがけて	—	2
(を)めぐって	—	5 (1)
(を)もって	—	24 (1)
(に)もとづいて	5	2
(に)よせて	—	1
(に)よって	20	127(16)
(に)わたって	1	9

なお，これら後置詞化したものの総数を雑誌の層別にみると下のとおりで，三層（経済・法律・自然科学など）に多いのが目だつ。これは，この層の雑誌の文体的なかたさと関係があるであろう。

層	一	二	三	四	五	計
連用形	3	15	49	6	9	79
～て	143(41)	189(35)	262(74)	100(20)	165(42)	859(212)

(4)　副詞的用法のもの

これには，さまざまの種類がある。まず，

○佐藤一が席を外し，**つづいて**杉浦も席を外しました。（中央公論　9月　331）

○内容は一字も読んでゐないことを**神かけて**誓ふ。（中央公論　6月　344）

など，それだけで副詞化したものがある。これらを動詞の副詞的用法とみるか，完全に副詞になったものとみるかは問題だが，とにかく，つぎのようなものがあげられる。

あいついで　あげて　あやまって　あらためて　あわてて　息せききって　一見して　いそいで　思いきって　きまって　くり返して　くわえて　このんで　さしあたって　しいて　そろって　だまって　ついで　つきつめて　つつしんで　つとめて　とびぬけて　ならんで　はれて　ひるがえって　まちがって　まとめて　むかって　目立って　よろこんで

なお，連用形の方でも，「さしあたり」「ひきつづき」など2，3の例はこれに属する。

○**そうして**，さらに三年後，彼女は再びアカデミー主演女優賞を獲得したのだった。（傑作倶楽部　4月　210）

○私は売春婦ではなく，**従って**そのような身の亡ぼし方をするわけはなかった。（新潮　3月　147）

などは接続詞に転じた例である。

「して」が形式化したものとして，つぎのようなものがある。

○広い舎房はガランと**して**さびしい。（週刊朝日　10月21日　32）

○若冠三十に**して**棺を蔽うまで　（日本週報　5月25日　32）

○結果は自からに**して**わかっている。（文芸春秋　2月　64）

○不名誉を受けるのは裁判官でなく**して**被告人の方である。（婦人公論　10月　390）

その他「何とかして」「どのようにして」「戦わずして 負けた」「規制すべくして行わなかった」「ふたりして」など。

1語ではなくて，2語以上のつながり全体として副詞句化したものとして，

○輸出は，**日を追って**，増加を続けている。（ダイヤモンド　4月14日　86）

○**それにもまして**立派なハンサム・ボーイになったその姿。（小説春秋　5月　224）

○会社がミュージカルスに**本腰を入れて**考えてくれるキッカケになれば　（婦人画報　8月　100）

その他「口を極めて」「……はさておいて」「そうやって」など。「いて」「いって」が逆接条件や前おきを示すつぎのような例も，これに近い。

○ローラン・プチは，野性的なそれで**いて**肌目の細かい歌を歌う。（知性　3月　123）

○オーバーフロー式だから**といって**，水道の冷水を使うことは禁物である。（婦人公論　6月　320）

○そういう意味から**いって**，このスエズ運河の問題解決いかんは……（中略）……非常に重要な分れ目になると思う。（中央公論　9月　65）

(5)　つぎにくる単語とともに，慣用句的に，あるいは複合語に近くもちいられるもの

○さっきとは**打って変った**上機嫌で　（週刊読売　7月22日　78）

○そのやさきに**降って湧いた**牧田金介の心中事件は　(婦人画報　3月　254)

○あとは**焼いて食はうと煮て食はうと**，こつちの意のままだ。(小説新潮　4月　36)

その他「当って砕けろ」「打って出る」「生まれてはじめて」「きめてかかる」「斬って捨てる」「とって代る」「とって食う」「とってつけたような」「飛んで火にいる夏の虫」「話して聞かせる」など。

(6)　内容を示すもの

○朝靄のなかに小黒山群島が**かすんで**みえるころ　(婦人倶楽部　2月　108)

○広いのが自慢のその風呂場には，浴みする客の高声が天井に**ひゞいて**聞こえる。(中央公論　11月　189)

○時間の芸術を空間の芸術に**たとへて**いふのも変ですが　(短歌　5月　78)

これらは，知覚作用や言語活動の内容を示しており，「寒く感じる」「小さく見える」などの形容詞のばあいと通じる点がある。

以上をのぞくと，連用形と「～て」とは一応おきかえることができる。一応というのは，おきかえたばあいに，同じ事実を表現していても，ニュアンスに差があることがあるからだ。

a）水爆を**搭載して**数千哩を飛行するようなロケットが　(世界　2月　61)

という文で，「水爆を搭載して」は，「飛行する」ようす，から身でとぶかつんでとぶかという，とぶときの状態をいっている。これに対して，

b）水爆を**搭載し**，数千哩を飛行するようなロケットが

といえば，「搭載し」「飛行する」は並列されて，ともにロケットの性質を別々にのべている。また，

c）そのロケットは，X基地で水爆を**搭載して**数千哩を飛行し，目的地に命中した。

のように，終止法の中におさまるばあいには，「搭載して」と「飛行し」は，ロケットの性能ではなくて，実際におこった事実を，時間的な前後関係にしたがってのべたものである。

A）以下に，中止法の示す意味的関係によって用例をわけた結果をのべる。この際，まず上にあげた，「時間的先行」「並列」「方法・ようす」という3つのグループにわけるが，このほか，つぎのようなものを「状況」として立てる。

○雨は午後に**なって**止んだ。(講談倶楽部　4月　37)

○一週間ほど**して**，友達から返事があった。(オール読物　7月　224)

○休暇が**あけて**東京の大学に帰った夏二は　(平凡　4月　224)

また，つぎのようなものを「前おき」として立てる。

○物的な損害に**して**，一日平均五百六十四万円という。(ダイヤモンド　2月1日　22)

○それを地上につけない速力から**推して**，すでに，数十町を駈け抜けているはずである。（週刊東京　12月22日　37）

○アサヒカメラに**もどって**「吉葉山」（見崎松太郎）はいかがです。（アサヒカメラ　2月　138）

また，つぎのように，下にうけることばが略されているものは別にする。

○独占資本の懐は**ふくらみ**，あなたのポケットは……といった書き方で　（週刊サンケイ　3月4日　66）

○涙がぽたぽたと小太郎の頬へ**落ちて**，「あら，ごめんなさい」
いそいでそれを手拭で拭ってくれるのだった。（小説サロン　8月　134）

なお，「下略」のなかには，「ネパールに行って」「新星は来り……」のように，文章の見出しとしてつかわれたものをふくむ（連用形 1，「～て」 6）。これについては，「～て」のばあい，下略という本来の用法からはなれて，見出しのための特別の用法として独立したともみられる。

層		一	二	三	四	五	計
連用形	先行	46	122	42	318	224	752
	並列	70	128	173	110	141	622
	ようす	6	4	3	—	6	19
	状況	—	2	1	1	1	5
	前おき	—	—	—	—	—	—
	下略	1	7	1	—	1	10
	計	123	263	220	429	373	1408
「～て」	先行	99	240	108	448	506	1401
	並列	65	62	27	63	99	316
	ようす	65	101	74	127	234	601
	状況	11	9	7	6	15	48
	前おき	3	5	8	1	3	20
	下略	10	13	3	15	43	84
	計	253	430	227	660	900	2470

したがって，合計6つのわくがあることになる。これらのどれに属するかの判定はひじょうに微妙で，人によって，どころか，自分でくりかえしてもかなりの食いちがいが出そうだ。だから，こまかい数字には意味がなく，全体の傾向を見る程度のものである。なお，どちらにでも解釈できそうなものは，なるべく基本的と思われる「時間的先行」の方に入れることにした。

上のように，どちらも時間的先行のものが多いが，連用形では並列が，「～て」ではようす以下が多い。ということは，一般化していうと，連用形は前後の重みのひとしいばあいに，「～て」は後に重点がおかれたばあいに，よくつかわれる，ということである。

(B)　ここで「かかり・うけ」ということばをつかうのは，あまり適当でないかもしれないが，ほかにさがせないのでつかうことにする。

雨がふってぬかる道を……

というとき，「ふって」は直後の「ぬかる」にかかるが，

雨がふって道がぬかった。

では「道が」をへだててかかっている。このように，直後のことばにかかるかどうかについて，連用形と「～て」とでは差がある。(「雨がふり，風がふいて，あれもようだった」のようにいくつも並んでいるときは，「ふり」は「ふいて」に，「ふいて」は「あれもようだ」に順にかかっているものとみなす。) 直後のものにかかっているものの実数と%は，下のとおりである。「～て」の方がきわだって大きな値を示している。また，意味的には，ようすのばあいに直後にかかる傾向がある。

	先行	並列	ようす	状況	前おき	計
連用形	13	26	2	—	—	41
%	*1.7*	*4.2*	*10.5*	*0.0*	*0.0*	*2.9*
～て	275	28	216	8	5	532
%	*19.6*	*8.9*	*35.9*	*16.7*	*25.0*	*22.3*

(C)　両者が座談会の速記や小説の会話など，話しことばをうつしたもののなかに出てきた実数と%は右のとおりで，「～て」の方が話しことば的である。

	先行	並列	ようす	状況	前おき	下略	計
連用形	10	11	—	—	—	—	21
%	*1.3*	*1.8*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*1.5*
～て	154	40	52	6	3	30	285
%	*11.0*	*12.7*	*8.7*	*12.5*	*15.0*	*35.7*	*11.5*

(D)　文体の問題として，動詞の中止法がいくつかならぶばあいには，つぎの２つの可能性が考えられる。第１は，それらが同次元の，連続しあるいは並列されたものであることを強調するために，同じ形をならべることだ。対句のばあいなどである。第２は，同じ形のくり返しによる単調さをさけるために，連用形と「～て」とをまぜてつかうものである。実際，この両方のばあいがあるとおもわれるが，そのどちらの傾向がつよいかをみるために，つぎのような調査をしてみた。

動詞の中止法のうち，あとにまた動詞の中止法が出てきて，これにかかっていくものだけをぬきだす。ただし，

○Aが去り，Bも帰り，Cがひとりで残った。

のように，ならんでいるばあいの「去り」は「帰り」にかかるものとする。

○Aが去り，Bも車を走らせて帰った。

のように，後続の「走らせて」が「帰った」のようすをいっているばあいは，「去り」は「帰った」にかかっていて，「走らせて」にはかからない，とする。

つぎに，後続の中止法を連用形と「～て」とにわける。

結果は右のとおりで，後続する中止法には連用形の方が多いが，一方，同形の中止法のくり返しをさけようとする傾向もみられる。

前＼後		連用	～て
連用形	先　行	103	158
	並　行	82	23
	ようす	1	3
	状　況	1	—
	前おき	—	—
	計	187	184
～　て	先　行	186	63
	並　行	22	7
	ようす	45	11
	状　況	6	2
	前おき	—	—
	計	259	83

連用形と「～て」との比率については，古代語についてもかんたんな調査をしたので，あわせて報告する。

とりあげたのは，土佐・竹取・伊勢および源氏の桐壺・帚木である。現代語のばあいと同様，まずつぎのようなものをおとした。（ページ数は日本古典文学大系本。）

（つぎに助詞のあるもの）

○魂を止めたる心地**して**なむ帰らせ給ひける。（竹取　57）

（副詞化したもの）

「からうじて」「たえて」「まして」など。

（後置詞化したもの）

○風の音，虫の音に**つけて**，物のみ悲しう思さるるに　（桐壺　41）

○長き爪**して**，眼をつかみつぶさん。（竹取　62）

（内容）

○けはひかたちの面影につと**そひて**思さるるにも　（桐壺　34）

○つらつきまみなどは，いとよう似たりしゆゑ，**かよひて**見えたまふも　（桐壺　47）

（補助用言につづくもの）

○文箱に**入れて**ありとなんいふなる。（伊勢　174）

○いくばくもなくて**持て**来ぬ。（伊勢　156）

実は，現代語の感覚でこれらを補助用言とするのは問題で，当時としては単に2つの動詞をつづけたにすぎないのかもしれないが，ここでは，現代語との対応上，これらを一応補助用言とした。「言ひ出づ」などの複合動詞が当時本当に複合していたかどうかということも，ここでは現代語になぞらえて考えておくことにする。

以上をのぞくと，つぎのような結果になる。どこまでを副詞化したもの，補助用言につづくものと見るかなどによって，多

	土佐	竹取	伊勢	桐壺	帚木
連用形	14	32	33	28	73
～　て	160	427	385	107	244

少のちがいが出てくるのは当然だから，ここでもこまかいところまではあまり意味がない。しかし，いずれにしても現代語にくらべて，「～て」がはなはだ優勢なことはあきらかだ。

これまで，連用形と「～て」との関係は，つぎのように説かれていた。

「中止法は，この形の機能として一般的であるが，近代語では連用形がこの働きを示す機会は減少しつつあるようである。これに代って，連用形にテの接した形が用いられることが多く，特に現代の話し言葉ではテのつかない連用中止は極めて少い。」(橋本四郎「動詞活用の変遷」『国文学解釈と鑑賞』1959年3月号)

これは，話しことばについてはあるいはそのとおりかもしれない。しかし，書きことばについては，まったく逆に，連用形の中止法としての用法は，古代語よりも現代語において増加しているのである。

しかも，古代語のばあい，連用形のなかには，つぎのようにことがらを列挙するものがかなりある。

○かかればこの人々，家に帰りて物を**思ひ**，祈を**し**，願を立つ。(竹取　31)

○その山科の宮に，滝**おとし**，水**走らせ**などして，おもしろく造られたるに　(伊勢　156)

これは現代語にもないことはないが，現代語では「～たり」で表わすことが多い。つまり，古代語の連用形は，現代語の「～たり」にあたる用法までふくんでいるのであって，それだけ，単純な中止の用法はせばまるわけだ。

「～て～て～て……」とつづく文章は，小学生の作文のように，やや単調な，それだけ素朴ともいえる感じを与える。連用形と「～て」とをまぜて使って，文体的に変化をもたせている現代文を見なれたわれわれが，土佐や竹取からうける素朴さの感じの一つの理由はこんなところにもあるだろう。そしてもし源氏で連用形の比率が高いことが，文章の洗練ということと関係づけられれば，それは一層興味のあることだろう。

以上のほか，いろんな作品から最初の10ページずつをぬいて，連用形と「～て」との数をかぞえた結果をつぎにあげておく。ただし，「伊曽保物語」は京都大学国文学会編の飜字本，「学問のすすめ」は「福沢諭吉全集」，「舞姫」は「鷗外全集」，その他は日本古典文学大系によった。作品のジャンル・文体によってかなりの差があること，しかし，大体の傾向としては，新らしいものほど連用形がふえていること，がいえるとおもう。

	a）連用形	b）～て	c）$\frac{a}{b}\times100$
枕草子	18	68	26
更級日記	11	82	13
今昔物語	29	194	15
大鏡	3	32	9
方丈記	28	57	49
平家物語	23	42	55
つれづれ草	15	19	79
天草本伊曽保物語	43	120	36
おくの細道	26	84	31
雨月物語	33	84	39
学問のすすめ	103	42	245
舞姫	30	79	38

〔その2〕　形容詞型のもののばあい

ここでは，本来の形容詞のほか，「～で(～く)なく」と「～で(～く)なくて」「～たく」と「～たくて」とを比較する。

これらのうち，「長くかかる」のように修飾語になっているもの，「長くてはいけない」「長くてかまわない(よい)」「長くてねえ」のように条件になっているものや助詞がついたものをのぞくと，右の数のものが残る。

		一	二	三	四	五	計
形容詞	連用形	12	26	31	10	44	123
	～て	3	5	5	12	12	37
～でない	連用形	15	13	12	15	17	72
	～て	3	2	—	3	6	14
～たい	連用形	—	—	—	—	1	1
	～て	—	—	—	1	—	1

このように，連用形の方がずっと多く使われている。その上，連用形の方が純粋な中止であるのにくらべて，「～て」の方は多少原因的なニュアンスをおびて下へかかることがある。この点，動詞のばあいと共通のものがある。

○暗くて姿は見えぬが　(小説の泉　10月　343)

○恥しくって，見せられたものじゃないよ　(婦人生活　8月　301)

もちろん，「～て」の方にも単純な中止はある。

○現物がなくて，来月物の売物がどうにかあるといった状態　(東洋経済新報　5月26日　36)

○初めがよくてあとで失敗する　(実業の日本　6月1日　92)

「～て」が比較的会話文に多いことも，この両者のちがいの一つである。形容詞のばあいを例にとると，右のとおりである。

	会話	地の文
連用形	6	117
～て	14	23

〔その3〕「～ないで」と「～なくて」

動詞の否定の「～なく」という形は，「降らなくなる」のように「なる」につづくか，「たりなく」「たまらなく」のように形容詞化ないし副詞化しているかのどちらかで，中止法はない。したがって，「～なく」と「～なくて」の対立もないのであるが，一方，似た形のものとして「～ないで」と「～なくて」とがある。

層	一	二	三	四	五	計
～ないで	5	4	4	5	8	26
～なくて	1	—	1	1	1	4

このちがいははっきりしないが，「～ないで」の方には

○今後の限界消費傾向は食糧や衣料には**向わないで**，耐久消費材とか住宅に向うはずである。（実業の日本　2月15日　15）

○**大食しないで**質のよい食物をするように気をつけましょう。（サンデー毎日　10月14日　54）

のように，かなり純粋の中止（並列）と思われるものと，

○世間をあまり気に**しないで**アベックできるようになりました。（婦人生活　10月　248）

○盛夏には，蓋を**しないで**布巾又はすだれをかけ　（婦人倶楽部　2月号付録　44）

のようにようすをあらわすニュアンスをおびたものとがある。これに対して，「～なくて」の4例は，どれも原因的なニュアンスをともなったものである。

○誰を相手にして訴訟を起してよいか，**はっきりしなくて**困る事件が　（ジュリスト　7月15日　59）

○その不安さに**堪えられなくて**，マーロットの家へ逃げ帰りました　（主婦と生活　3月　59）

○国文じゃ，いくらなんでも源氏の講義に谷崎源氏をテキストにするわけにも**ゆかなくて**，やはり校訂本を使ったりしているそうだが　（新潮　7月　24）

○寒々としたヒステリーの恐妻のもとへ帰る気も**しなくて**，自然，心の慰安を求めて，有楽町，新宿かいわいの裏通りをうろつくこととなります。（娯楽よみうり　3月16日　31）

これが偶然のものか，一般的に見られるちがいかは，これだけの資料で断定するのは早すぎるであろう。

第4節　「だ」と「である」

「だ」と「である」の用法を，つぎの5つにわけて比較することにする。「終止法」「連体法」「接続法」「中止法」「その他」。

ただし，終止法・連体法には，「だ」「だった」「だろう」「だったろう」の形，およびこれに対応する「である」の方の形を入れる。接続法には，これらの形に

接続助詞がついたもの，「だったり（であったり）」「だったら（であったら）」「であれば」を入れる。中止法は，「で」および「であり」「であって」である。「その他」としては，「～よりも」「～にしても」「～らしい」などの形を入れる。

なお，ここでは名詞につくばあいと，形容動詞の語尾のばあいとを区別していない。また，接続詞化した「だが」「だけれども」の類は集計からはぶいた。

（だ）	終止	連体	接続	中止	その他	計
だ	907	—	253	—	2	1162
だった	204	17	34	—	7	262
だろう	191	1	18	—	—	210
だったろう	3	—	1	—	—	4
で	—	—	—	519	—	519
「だったら」など	—	—	20	—	—	20
計	1305	18	326	519	9	2177

（である）	終止	連体	接続	中止	その他	計
である	671	82	81	—	19	853
であった	119	18	12	—	5	154
であろう	85	3	11	—	—	99
であったろう	2	—	—	—	—	2
であり	—	—	—	64	—	64
であって	—	—	—	19	—	19
「であったら」など	—	—	5	—	—	5
	877	103	109	83	24	1196

終止法については，「だ」の方が多いが，実は，この半数ぐらいは会話文中のものである。一方，「である」は会話文にほとんど出てこないから，地の文だけを比較すれば，大体同じくらいになる。

連体法では，「だ」の連体にあたる「な」を合わせてないため，「である」の方が多くなっている。「だった」以下だけの比較では差がない。

接続法では「だ」が多い。会話文中に「だ」が多いことを考慮しても，地の文だけでも「である」よりはずっと多くもちいられている。

中止法では「だ」系の「で」が圧倒的だが，このばあい，そもそも「で」を「だ」系に入れて「である」系に入れないことに問題があるであろう。

さて，接続法では「だ」がわりに多い。終止法の用例数を100としたときの接

続法の用例数は;「だ」25,「である」12である。このことについては，2とおりに解釈できる。第1に,「だ」体の文は構文が複雑で,「である」体の文よりも複文が多く，そのために接続法で多く出てくるということである。第2に，「である」体の文でも，文中の接続法は「だ」になる傾向がある，と考えることである。

この第2の解釈をうらづける傾向は，つぎのようにして示すことができる。今,「だ」や「である」が接続法としてもちいられた文が,「だ」体のものか「である」体のものかをしらべてみる。その判定の基準は，その文が「だ」でおわっているか「である」でおわっているかである。もちろん，動詞や「〜ではない」でおわっていてどちらともいえないもの，「です」でおわっているものなどもあるから，はっきりどちらかに属するといえるものはむしろ少ない。(「だ」体・「である」体はいりまじることが多いから，単位としては文章をとらずに文をとらなければならない。つまり，となりの文が「だ」や「である」でおわっているというだけの理由では，その文も「だ」体または「である」体に属するとみなすわけにはいかない。)

右の表からあきらかなように，「だ」体の文では接続法も「だ」になることが多いが，「である」体の文では「だ」と「である」とがほぼ同数になっている。つまり，文中の接続法は「だ」になりやすい，という，さきにあげた第2の仮説が正しいといえる。もっとも，2つの解釈は，かならずしもたがいにむじゅんするものではないから，このことは第1の解釈を否定したことにはならない。

接続法＼文(終止法)	だ	である
だ	44	35
である	12	33

第5節　語形のゆれ

〔その1〕「〜い」と「〜な」

「あたたかい〜あたたかな」「大きい〜大きな」のように，形容詞と形容動詞（または連体詞）のあいだで語形のゆれているものがある。その用例数を下にあげる。なお，第5節の結果は，標本の全範囲にわたっての数であり，助詞・助動詞の調査の約3倍にあたるものである。カッコのなかに（体23）のようにしるしたのは，たとえば「あたたかい」という形26のうちで，「あたたかな」とおきかえ可能な連体的用法が23例であることを示す。

	「～い」系	「～な」系
あたたかい	～い26(体23)，～く12	～な３
きいろい	～い７(体７)，～く１，～かった１	～の１，～に１
こまかい	～い27(体26)，～く14	～な２，～に３，～です１
四角い	～い８(体８)	～な４
まっくらい	～い１(体１)	～な３，に３，で１，です１
まっくろい		～の１，に１
まっしろい	～い２(体２)，～く１	～な４，に１
やわらかい	～い24(体21)，～く18	～な１，～に１，～で２
大きい	～い78(体43)，～く116，～かった7	～な195，～に1
おかしい	～い33(体６)，～く15，～かった２	～な９
ちいさい	～い58(体52)，～く35	～な62

〔その２〕　「～な」と「～の」

「特別な～特別の」「旧式な～旧式の」のように，体言にかかるときに「～な」と「～の」でゆれるものがある。このゆれの状態を１語１語についてしらべるには，今回の資料ではたりないようだが，一応問題になる語について数字をあげておこう。ここでは，こまかいニュアンスを別にすればたがいにおきかえられる「～な」と「～の」を問題にしているので，「特別なので」「<新式>と<旧式>の区別」のように，おきかえられない用法は無視する。ただし，「特別なのは(が・を……)」の類は「特別のは（が・を……)」の類と対応するものとみて，採集することにした。

	な	の		な	の		な	の
悪質	—	1	永遠	—	5	緊急	—	1
あたりまえ	—	3	永久	—	3	屈強	—	1
厚手	1	6	大つぶ	—	3	好調	1	4
意外	13	2	格別	2	5	好適	2	2
異質	—	3	重ね重ね	—	1	高名	2	—
異常	9	—	過剰	2	—	個々	—	8
異色	1	1	過大	1	1	古参	—	2
意地悪	1	—	型やぶり	—	1	古風	3	—
一様	—	1	かなり	—	9	固有	—	4
いびつ	1	—	金目	—	1	最悪	—	5
いろいろ	45	35	かんじん	—	10	細心	1	1
色白	2	2	肝要	1	—	最善	—	2
薄手	—	5	旧式	1	2	最適	1	—
腕きき	—	1	共通	1	8	最良	—	4

	な	の		な	の		な	の
さまざま	10	8	手ごろ	—	2	不動	—	2
散々	—	1	でたらめ	1	1	太目	—	4
種々	1	15	手近	2	—	不名誉	1	—
主要	5	—	当然	1	21	不滅	—	2
純粋	6	3	透明	1	—	不要	—	1
順当	—	2	同様	2	10	別	7	32
詳細	2	—	得意	—	5	別個	2	3
上等	1	4	特異	3	2	別々	—	2
新鋭	—	2	独自	2	7	奔放	1	—
新式	—	1	特殊	12	2	真赤	5	—
神聖	3	—	特定	1	8	真暗	3	—
水平	1	1	独特	—	12	真黒	—	1
正式	3	4	特別	8	14	真青	1	—
正常	4	1	特有	2	11	未熟	1	—
正反対	1	4	どっちつかず	—	1	未曽有	—	2
絶好	—	3	どろだらけ	—	1	身近	2	—
相応	—	2	ないしょ	—	1	耳より	1	—
相当	13	18	莫大	6	—	無傷	—	1
そっくり	—	3	はじめて	—	18	無限	—	2
たいがい	—	1	抜群	—	1	無実	—	4
大事	18	1	反対	1	8	無制限	1	—
大好き	2	—	非公式	—	1	無名	—	1
たいてい	—	9	非常識	1	1	無用	2	3
多額	—	4	非能率	—	1	名誉	—	2
たくさん	—	13	必死	—	8	文字どおり	—	2
だぶだぶ	—	2	人なみ	1	1	安上がり	1	1
多忙	—	1	非凡	1	—	有害	1	—
多様	—	1	秘密	—	1	有数	—	2
中途半ぱ	1	—	不きげん	3	—	洋風	—	2
直接	—	4	不審	2	3	よほど	—	6
著名	4	—	不相応	1	1	良質	—	2
～的	531	13	普通	—	54	類似	—	3
適度	—	5	不敵	3	—	わずか	11	11

なお，「～的」のうち，「の」のついた形であらわれたものは，つぎのとおりである。(各1回)

圧倒的・強制的・偶発的・経済的・個人的・実質的・しんしゃく的・代表的・典型的・同情的・迫真的・物質的・理想的

〔その3〕 活用のゆれ

「する」が1字の漢語などについてサ変の動詞をつくるばあい，「愛さない」のように5段化するものもあり，「感じられる」のように1段化するものもある。標本の範囲でこれら5段化・1段化の傾向がどうなっているかの調査結果をつぎにあげる。ただし，二つ以上の活用で共通の形をもっている，つぎのようなものは，そのどちらに属するかがわからない。

5段とサ変で共通のもの――～す（文語調の終止），～すべき，～すまい，～される，～させる

1段とサ変で共通のもの――～しない，～しよう

5段・1段・サ変で共通のもの――～し（中止），～した，～します，～してこれら共通の形のものが多いので，一つ一つの動詞については，どの活用に属するか，はっきりしないばあいが多い。しかし，いろんな動詞をひっくるめてしまうと，おのおのの活用に属することがはっきりしている例は，つぎのとおりで，一般的な傾向がうかがえる。

すなわち，「～ずる」とにごるばあいには，一段化の傾向がかなりいちじるしく，5段化の傾向はない。これに対して，「～する」とすむものには，5段化の傾向がみられるが，「～ずる」の1段化にくらべれば，その程度は低い。

	5段	1段	サ変
～する	9	2	468
～ずる	—	117	101

	5段	1段	サ変	5段サ変	1段サ変	5段1段サ変
愛する	—	—	15	17	—	31
あまんずる	—	—	1	—	—	1
案ずる	—	4	1	—	—	3
うとんずる	—	—	1	—	—	—
映ずる	—	1	—	—	—	3
演ずる	—	3	4	—	—	15
応ずる	—	3	7	—	3	15
重んずる	—	1	2	—	—	—
解する	—	—	4	6	—	1
介する	—	—	—	—	—	1
会する	—	—	—	—	—	2
害する	1	—	4	2	—	7
化する	1	—	—	—	—	8

	5段	1段	サ変	5段 サ変	1段 サ変	5段 1段 サ変
課(科)する	1	—	6	1	—	6
合する	—	—	—	—	—	3
関する	—	—	83	—	—	21
感ずる	—	68	16	1	12	102
帰する	—	—	1	—	—	5
期する	1	—	7	1	—	3
擬する	—	—	—	—	—	2
喫する	—	—	—	—	—	3
休する	—	—	—	2	—	—
窮する	—	—	—	—	—	3
供する	—	—	4	—	2	2
禁ずる	—	4	1	1	—	2
屈する	—	—	2	—	—	1
決する	—	—	2	2	3	6
昂ずる	—	—	—	—	—	2
講ずる	—	1	1	2	2	4
混ずる	—	—	1	—	—	—
際する	—	—	—	—	—	12
坐する	—	—	—	—	—	1
察する	—	2	5	—	—	5
散ずる	—	—	1	—	—	—
死する	—	—	1	1	—	2
資する	—	—	—	—	—	1
持する	—	—	1	—	—	2
辞する	—	—	—	—	—	2
祝する	—	—	—	—	—	1
熟する	—	—	1	—	—	1
準ずる	—	—	1	—	—	1
称する	—	—	10	3	—	14
生ずる	—	5	15	1	1	26
乗ずる	—	1	1	—	—	3
処する	—	—	6	—	—	—
除する	—	—	—	—	—	1
信ずる	—	11	12	—	1	28
制する	—	—	1	1	—	3

	5段	1段	サ変	5段 サ変	1段 サ変	5段 1段 サ変
接する	—	—	4	—	1	9
絶する	—	—	1	1	—	2
宣する	—	—	—	—	—	1
奏する	—	—	—	—	—	1
蔵する	—	—	2	—	—	—
属する	—	—	19	2	—	10
損する	—	—	1	—	1	—
存する	—	—	4	—	2	1
損ずる	—	—	—	—	—	1
存ずる	—	—	—	—	—	14
対する	—	—	151	—	—	267
託する	2	—	—	—	—	4
達する	—	—	17	—	3	25
脱する	—	—	2	—	—	4
歎ずる	—	—	1	—	—	—
断ずる	—	1	—	—	—	1
沖する	—	—	1	—	—	—
通ずる	—	6	7	1	2	52
呈する	—	—	6	1	—	12
点ずる	—	—	—	—	—	1
転ずる	—	—	4	—	—	5
投ずる	—	2	2	—	—	8
得する	—	—	—	—	—	1
毒する	—	—	2	—	—	—
なくする	1	—	1	—	—	13
任ずる	—	—	3	—	—	—
熱する	—	—	2	—	—	8
念ずる	—	—	—	—	—	1
拝する	—	—	1	1	—	1
配する	—	—	—	3	—	7
排する	—	—	—	1	—	1
倍する	—	—	1	—	—	—
発する	—	—	9	—	2	8
罰する	—	—	3	—	—	—
反する	—	—	6	—	—	13

	5段	1段	サ変	5段 サ変	1段 サ変	5段 1段 サ変
比する	—	—	2	1	—	7
表する	—	—	3	—	—	5
評する	—	—	3	—	—	5
瀕する	—	—	—	—	—	3
封ずる	—	—	1	—	—	—
服する	—	—	2	—	1	1
付する	1	—	2	—	—	—
扮する	—	—	4	—	—	11
変ずる	—	—	—	1	—	1
弁ずる	—	1	1	—	—	—
奉ずる	—	—	1	—	—	1
報ずる	—	1	2	—	—	5
欲する	—	—	1	—	2	1
没する	—	—	—	—	—	3
魅する	—	—	4	—	—	—
命ずる	—	3	7	—	—	10
銘ずる	—	—	—	—	—	1
目する	—	—	—	1	—	—
黙する	—	—	—	—	—	1
約する	—	—	—	1	—	1
扼する	—	—	1	—	—	—
訳する	—	—	—	—	—	3
有する	—	—	14	1	—	6
要する	—	—	41	1	2	6
擁する	—	—	2	—	—	3
浴する	—	—	2	—	—	—
よみする	—	—	—	—	—	1
利する	—	—	1	—	—	2
略する	—	—	—	2	—	2
論ずる	—	1	5	—	1	8
和する	1	—	—	—	—	1

このほか，活用のゆれには，つぎのようなものがある。（？はどちらかきめかねるもの）

（5段〜上1段）

あく	—	借る	—	しむ	2	たる	14	ほかに，「1時間たらず」など5
あきる	8	借りる	34	しみる	12	たりる	27	
?	—	?	3	?	2	?	2	

ほろぶ	—	満つ	2（ともに「〜ない」）
ほろびる	1	満ちる	22（全部「〜た(て)」）
?	2	?	2

（5段〜下1段）

くさる	3	下さる	82	ほかに「下さい」167	蹴る(5) 5
くされる	—	下される	2	「下すった(て)」2	蹴る(1) —
?	—	?	—		? 2

すたる	—	つなぐ	12	なさる	67	ほかに「なさい」66
すたれる	2	つなげる	—	なされる	4	「なすった(て)」11
?	—	?	—	?	—	

にらむ	13	任す	6	もる	—
にらめる	—	任せる	25	もれる	15
?	—	?	—	?	—

（その他）

伝う	2	同義的なばあいだけ
伝わる	2	

〔その4〕 音便のゆれ

ウ音便と促音便とのゆれとして，つぎのようなものがある

負うて	1	沿うて	1
負って	3	沿って	15

注1）　第1節と第2節とについての記述は，この論文集の鈴木重幸「現代日本語の動詞のテンス」の研究をもとにしている。意志についてはp. 7, 進行中についてはp. 6, 心理活動についてはp. 19〜21を参照。

注2）　「層」というのは，雑誌の分野別のことである。

一層……評論・芸文
二層……庶民
三層……実用・通俗科学
四層……生活・婦人
五層……娯楽・趣味

それぞれに属する雑誌名は，「報告書」を参照。

注3）　鈴木重幸「首里方言の動詞のいいきりの形」（『国語学』41集）

注4）　大野晋「日本語の動詞の活用形の起源について」（『国語と国文学』1953年6月号）

注5)　上村幸雄「琉球方言の特色」(「言語生活」1963年7月号)

注6)　ここでつかった成分の呼び名については，国語研究所報告32『話しことばの文型(2)』を参照。